

や心構え)と実践を阻む心の弱さの両面から、人間理解を深めていくことになる。

具体的には、自然や動植物の不思議さや生命の力を知り、共に生きていることの愛おしさを感じながら、それらを大事に守り育てていこうとすることで、共に快い感情をもてたり、互いの信頼関係が深まったりして、自然や動植物に対して人間がもっとやさしく生活できるようになることを理解させる。その一方で、自然や動植物を大切に、大事に守り育てていきたいと思いつつも、動植物の気持ちになって考えることがむずかしく、自分本位な考え、楽観的な見方などの心の弱さからなかなか実践できないことがあることにも気付かせるようにする。そして、それらの弱さと望ましい生き方との間に起こる心の葛藤を乗り越えていくためには、動植物の気持ちを考える、動植物にも同じように命がある、自然や動植物のことをもっと知るなどの心構えが大切であることも理解させる。

このような内容にかかわる生き方への共感を高めるために、本主題では読み物資料「がんばれ 大うみがめ」(学研)を取り上げることにした。この資料は次のような粗筋である。

大うみがめのパトロールにきた主人公は、産卵をする大うみがめの様子を見て、たまごをもってかえりたいと思ってしまう。しかし、妹やおじさんの言葉や必死にたまごを産む大うみがめの様子から思い改め、応援するという粗筋である。

この資料を扱うに際し、話の内容の理解を深め、主人公の心情に十分にふれさせるために、録音CDや一枚絵を活用する。また、主人公の立場に自分を置き換えさせたり、子どもたちの体験場面を振り返らせたりしながら類推させるようにし、主人公の心情や心情の変化に自我関与させる。

具体的には、まず資料の一読後の感想から、大うみがめのたまごを欲しがってはいけないと知りつつも持って帰りたいと感じてしまう場面に焦点化し、主人公の心の弱さを共感的に追究させる。

次に、大うみがめの様子を見た妹やおじさんの言葉からたまごをもって帰りたいという思いを反省し、申し訳なく思った主人公の意義や心構えを追究させる。その際、**対話活動を通して、重点とする意義や心構えについて考えさせるようにする。さらに、授業の中で感じたことを自分の生活と重ね合わせてまとめることを通して、生活場面での意欲や態度を高めるようにする。**

このような過程を重視する学習を通して得られる能力や態度は、自然や動植物の不思議さや生命の力を知り、共に生きていることの愛おしさを感じることで、それらを大事に守り育ていこうとすることを旨とした生き方をする意欲につながるものであると考える。

(3) 子どもの実態

本学級の子どものたちの身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接することにかかわる経験や、実践を阻む心の弱さ、実践を支える見方・考え方・感じ方(意義・心構え)等についての認識は以下の通りである。

[表1] 実践できた経験(総反応数63)とその時の感情(総反応数39)

経験場面	反応数(人)	その時の感情	反応数(人)
家で育てている植物	33	元気に育ててほしい	18
家で飼っているペットや昆虫	21	大切に育てたい	8
学校で飼っている生きもの(金魚や一人一鉢など)	9	自分がうれしい	4
		収穫したい	1
		生きものが喜ぶ	1

[表2] 実践を阻む心の弱さの認識(総反応数51)

心の弱さ	反応数(人)	心の弱さ	反応数(人)	心の弱さ	反応数(人)
自分本位な考え(自分の思い通りにしたい)	27	思慮不足(生きもので遊びたい)	4	無関心(忘れていた)	1
怠惰な感情(めんどう)	8	無責任(あきる)	4		
楽観的な考え(大丈夫だろう)	4	労苦からの逃避(疲れる)	3		

[表3] 実践を支える見方・考え方・感じ方(意義・心構え)についての認識(総反応数105)

見方・考え方・感じ方	反応数(人)	見方・考え方・感じ方	反応数(人)	見方・考え方・感じ方	反応数(人)
うれしくなる	19	動植物が喜んでくれる	24	みんなが喜ぶ	27
たのしくなる	9	大きく元気に育つことができる。	10	家族が喜ぶ。	7
自分のためになる	2	長生きできる	4	友達が喜ぶ	3
お世話するといふ経験になる	2				

[表1]から、家や学校などで育てたり飼ったりしている身近な動植物に対しては「元気にそだってほしい」「大切に育てたい」のように大切にお世話したいと感じている子どもが多いことや「自分がうれしい」と自己の喜びとして感じている子どもも見られる。

しかし、飼育・栽培している身近な自然や動植物に対しても[表2]から分かるように「自分の思い通りにしたい」「めんどろ」「これくらい大丈夫だろう」といった感情から、やさしい心で接することできないことがあることに気付いていることも分かる。さらに、[表3]から自然や動植物を大切にすることについては、「うれしくなる」「動植物が喜んでくれる」「みんなが喜ぶ」などの意義を感じたり、また「大きく育てたい」という心構えをもっていたりする子どもも見られる。

しかし、飼育したり栽培したりする経験が十分でないことから全体的に自己にかかわる認識への反応数が多かったり、自分から積極的に動植物に対して関わっていくような意義や心構えについては感じたりしている子どもが少ないことがわかる。自己にかかわる体験場面での内面と重ね合わせた見方・考え方・感じ方したりする子どもが多いことがわかる。

これらの実態から、さらに**自分の生き方とのかかわりを意識しながら追究できるように「自然や動植物のことをもっと知る」「動植物にも同じように命がある」という意義等について重点的に扱ったり、本校における低学年の学校での体験活動との関連を図ったりする必要**がある。

一方、道徳の時間においては、本学級の子どもたちは、登場人物の心情や心情の変化について積極的に考えを發表するが、道徳的価値に対する見方・考え方・感じ方を十分に深めたり、広げたりするところまでは至っていない。そこで、**多様な見方・考え方・感じ方に触れさえる中で、学んだことと自分の生き方とのかかわりを意識させながら追究する**ような働きかけを具体化していく。

(4) 指導上の留意点

本主題の指導を展開するにあたっては、身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接することのよさの実感を深める中で、子どもたちがこれまでに様々な自然や動植物との体験で感じてきた道徳的価値にかかわる意識が、これからの生き方へと連続し、発展していくようにしたい。

ア この内容にかかわる生き方についての切実な問題意識をもたせるために、これまでの**体験場面を振り返らせ、動植物に対するこれまでの意識や世話をした時の気持ちとできなかつた時の気持ちを対比させ**、その矛盾から子ども一人一人が考えていきたい問題を設定させるようにする。

イ 主人公の心情や心情の変化に共感させ、ここでの意義・心構えへの見方・感じ方・考え方を十分に深めたり広げたりできるように次のような働きかけを行う。

まず、自分本位な考えから大うみがめのたまごをほしいと思った主人公の心の弱さに共感的に考えさせるため、卵をほしいと思った場面について話し合わせ、「ほしかつた」「一つぐらいはいい」などの心の弱さについて追究させる。その際、重点として指導する意義や心構えを中心に道徳的価値に対する考えを深めたり、広めたりするようにする。

次に主人公の気持ちが大きく変わる要因となつた、大うみがめが必死になつて産卵する様子や妹やおじさんの話を聞いた場面に焦点化し、大うみがめの様子や生命の尊さやはかなさを考えさせたり、妹やおじさんの言葉を聞いた主人公の気持ちを関係付けたりしながら追究できるようにする。その際、**主人公の心の弱さやそのことにより生じる葛藤を乗り越え「かめさんごめんね。かめさんがんばれ。」と言つた主人公の背景にある気持ちについて、対話活動を通して考えることで、その意義や心構えを捉え直させ、重点とする指導内容にかかわる見方・感じ方・考え方を深めたり、広めさせたりできるようにする。**

ウ この内容にかかわる自己の生き方についての考えを深め、これからの生活の中で生かしていこうとする意欲を高めるために、主人公の生き方を基に自分の生き方を振り返らせる。その際、**書く活動を取り入れ、自分の生き方の中で大切にしたいという思いを実際に生かせそうな場面を考えさせたり、生かすことを拒みそうな自分の弱さを考えさせたりしながら、自分のこれからの生き方について具体的にイメージをもつことができる場を設定する。**

3 本 時

(1) ねらい

- ア 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接することにかかわる自分自身の生き方を見つめ、自分自身のもつ心の葛藤を乗り越えて、動植物を大事に守っていこうとする気持ちを高めることができる。
- イ 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接することにかかわる見方・考え方・感じ方を自らの体験場面での内面と重ね合わせて類推しながら深めたり、広げたりすることができる。
- ウ 自分本位な考えや楽観的な考えなどの心の弱さから、自然に親しみ、動植物にやさしく気持ちをもつことができないことに気付くとともに、自然に親しんだり、動植物にやさしい気持ち接したりすることのよさを理解し、身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接することの意義や心構えの大切さを理解することができる。

(2) 本時の展開に当たって

重点とした意義等について、見方・考え方・感じ方をさらに深め、広げることができるようにするために、対話活動を通して考えさせるようにする。その際、これまでの自分の体験を基に、自分の気持ちやその背景にある理由を自分と友だちと比べたり、聞き合ったりする。また、**学習したことをこれからの自分の生き方の中でどのようにかかわらせていきたいかという具体的なイメージをもたせるために、ワークシートを活用して自分の考えをまとめさせる。**

(3) 実 際

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働きかけ
気付く	1 自然や動植物に対して優しくできた時やできなかった時の気持ちを発表し、考えていきたい問題に気付く。 動物や植物にやさしく接するにはどんな気持ちがいせつだろう	(分) ↑ 7 ↓	○ 自然や動植物に対して優しく接することができた時とできなかった時の気持ちを発表させ、その気持ちの矛盾から問題意識をもたせる。
	2 資料「がんばれ 大うみがめ」を読んで、動物にやさしい心で接することにかかわる生き方についてはなしあう。 (1) 「ぼく」の言動や心情、心情の変化について感想をもち、発表する。 (2) 大うみがめの産卵を初めて見たときの「ぼく」心の弱さについて話し合う。 	↑ 15 ↓	○ 資料を感動的に読み取らせるために、録音CDや場面絵を効果的に活用する。 ○ 「ぼく」の心の弱さや心情の変化への共感を高めるために資料一読後の感想から、「卵をもって帰りたい。」と思った場面に焦点化する。 ⑨ 『卵をもって帰りたい。』と思ったのはどんな気持ちからだろう。』 ○ 「ぼく」の気持ちを自らの体験場面での内面と重ね合わせて類推させるために、共感できる「ぼく」の気持ちから自己の経験について想起させる。 ○ 「ぼく」の共感を高めるために、発表した子どもの発言の背景にある心情について問い返したり、発表を聞いている子どもたちへ問いかけたりする。 ⑨ 『「ぼく」は、おじさんの言葉から、どんなことに気付いて『かめさん、ごめんね。かめさん、がんばれ。』と祈りはじめたのだろう。』
見つける	【意義】 心がすっきりする→命の尊さが分かる→すべての生命の尊さがわかる→みんなで喜び合える→自然や動植物と人間が仲良く生活できる。→生活にいかしていける。 【心構え】 自然や動植物のことをもっとよく知る。動物にも同じように命がある。動物の気持ちを考える。自分も同じ生き物である。 (3) 「ぼく」の生き方を振り返り、自分と友だちの考えで、感じたことや考えたことを発表し合う。	↑ 13 ↓	○ 重点となる意義や心構えを深めたり、広げたりするために、大うみがめに祈り始めた「ぼく」の心情や心情の変化を共感的に捉えさせる。その際、マグネットシートを用いて対話活動を行い、友だちの考えと自分の考えを比べたり、背景にある理由を聞き合ったりしながら、多様な考えに触れさせる。
	3 学習したことを振り返り、動物に優しく接するには、どんな気持ちをもつことが大切か、自分なりの考えをまとめる。 動物や植物についてもっと知ってから、接していきたいな。 動物や植物にも同じように命から大事にしないとイケない。	↑ 8 ↓	○ 学んだことを自分の生活とのかかわりの中で考えさせるようにするために、ワークシートを活用し、自分なりの考えをまとめさせる。その際、学習した道徳的価値に対し、自分がこれからの生活の中で大切にしたい気持ちをどのような生活の場面で生かせそうか、生かすことを拒みそうな自分の弱さは何かといった視点で考えさせる
見通す	4 動植物に優しく接することについて教師の説話を聞く。	↑ 2 ↓	○ 子どもたちが感じると思われる意義や心構えに関係の深い写真を見せながら説話を行い、実践への意欲を高めるようにする。